実践と論考

トランスレーショナル対人支援研究

――より能動的・体系的な学・実連携研究に向けて――

松　田　亮　三

（立命館大学産業社会学部）

対人支援の諸領域において研究と実践の連携を促進するために，医学領域におけるトランスレーショナル研究の概念を対人支援において用いることを検討した。「トランスレーショナル研究」の概念を既存文献から検討すると，それは基礎研究から臨床的知見，そして臨床的エビデンスの確立から普及と実施，さらに人々の健康への影響までを含む戦略的な研究の移行を意味する。「トランスレーショナル研究」概念を用いることは，研究者と実践者の戦略的連携を強め，新たな対人支援法の開発と普及につながる可能性がある。対人支援の特徴を考慮すれば，トランスレーショナル対人支援研究は，以下のような点に留意して展開されることが重要である。第一に，対人支援は複雑であり，そこで評価される実践の概念化が重要な課題である。第二に，対人支援が実施される制度的文脈を考慮した展開が求められる。第三に，複雑で困難な状況のもとで，研究者と実践者の協力を実施する必要がある。第四に，新しい支援実践の多様な普及・実施過程を検討する必要がある。

キーワード：トランスレーショナル研究，対人支援，研究戦略，トランスレーショナル対人支援研究，学・実連携

立命館人間科学研究，No.34，69-76，2016.

はじめに

さまざまな支援を学術研究の課題としてどう受け止めるか，逆に，学術研究の成果をいかに支援実践に活用するか，そのための連携をどのようにして進めていくのか，という課題は，おそらくこの領域で研究に携わるものであれば，誰もが考えている事柄であろう。

たとえば社会福祉領域においては研究と実践との共同あるいは連携が真摯に検討されてきた。ソーシャルワーカーとしての実践から研究者に転じた高山は，自らの経験をふまえて，「『実践』と『研究』には隔たりがあることを肯定的に理解」（高山 2008:123）し，その隔たりを埋める方法ではなく，むしろ橋渡しをする方法を考えることを提唱している。同じく実践から研究に転じた津田（2008）は，実践と理論の融合に向けて，社会福祉援助の理論の現場への適用，すでに行われている実践の理論による根拠づけ，事例の蓄積を通じた理論の再構築，という3つのチャンネルがあるとしている。さらに，山口（2008）は，研究者が臨床実践の現場をふまえてその改善を行う臨床的態度をもち，実践者が実践を分析しそれを他の人に説明する研究的態度をもち，両者が協働作業を行うことが社会福祉研究では重要としている。

心理学・社会学等の各種の学術領域が支援の課題にとりくむ上では，このような議論をふまえて，実践現場と結びついた学・実連環型研究

の在り方について検討することが重要である。本稿では，その検討に向けた作業の一つとして，基礎研究の成果を臨床医療実践に結びつくことが意図的に追求されるようになっている医学領域での議論，特にトランスレーショナル研究（translational research）の概念を，支援の研究・実践との関わりにおいて検討したい。まず，トランスレーショナル研究の概念について述べ，それに続いて支援に関わる研究領域においてその概念を適用する場合の注意事項について検討する。

Ⅰ　医学におけるトランスレーショナル研究の概念

トランスレーショナル研究の概念の中核には，生物医学の基礎的研究の成果を，臨床医学に応用する過程を促進する研究という考え方がある[1)]。それを端的に示す言い方は，「基礎研究（ベンチ）の発見の臨床適用（ベッドサイド）への変容」（Ruttenberg, Clark et al. 2007）を意図的に促進するというものである。この用語は，トランスレーショナル科学（translational science）という考え方とともに，すでに1990年代半ばには用いられていたが（Morrow & Bellg 1994），2003年に米国の国立衛生研究所（National Institute of Health, NIH）がその研究振興・資金配分戦略（NIH Roadmap）において位置づけ，広域トランスレーショナル研究センターの配置等を実施する中で広まった（Zerhouni 2003; Woolf 2008; Collins, Wilder et al. 2014）。実際，その後英国，欧州連合の研究資金においてもトランスレーショナル研究を重視した配分が行われるようになった（Woolf 2008; Rabin & Brownson 2012）。

日本でも，文部科学省が2004（平成16）年度から「革新的ながん治療法等の開発に向けた研究の推進－トランスレーショナル・リサーチ事業の推進－」を開始し，以後継続して関連事業をすすめている[2)]。さらに，2011年度からの第4期科学技術基本計画は[3)]，創薬や医療機器開発につながるシーズを生み出し，その実用化を加速する一環として「橋渡し」研究拠点を充実・強化することを位置づけている。ただし，translational researchという用語を冠したセンターを設置している大学の組織をいくつかみると，「最先端医療イノベーションセンター（Center of Medical Innovation and Translational Research）」（大阪大学）[4)]，「探索医療センター（Translational Research Center）」（京都大学）[5)]，「トランスレーショナルリサーチセンター（Translational Research Center）」（東京大学）[6)]，「トランスレーショナル・リサーチ・イニシアティブ（Translational Research Initiative）」（東京大学）[7)]などとなっており，この用語に対応する

1）医学領域では分子生物学において，DNA上の遺伝情報を用いてタンパク質が合成される過程の一部，すなわちメッセンジャーRNAからタンパク質合成への情報の移転を指す翻訳（translation）の形容詞として，“translational”という言葉が用いられてきた。

2）文部科学省「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」ウエブサイト（http://www.tr.mext.go.jp/outline.html, 2015年11月18日閲覧）より。

3）平成23年8月19日閣議決定（http://www8.cao.go.jp / cstp/ kihonkeikaku/ 4honbun.pdf, 2015年11月18日閲覧）。なお，第4期科学技術基本計画では，社会と科学者コミュニティ・組織をつなぐという文脈でも「橋渡し」が用いられている。

4）大阪大学のウエブサイト（http://www.comit.med.osaka-u.ac.jp/jp/about/index.html, 2015年11月18日閲覧）より。

5）京都大学のウエブサイト（http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp/~trc/, 2015年11月18日閲覧）より。

6）東京大学のウエブサイト（http://www.h.u-tokyo.ac.jp/patient/depts/trc/ および http://www.h.u-tokyo.ac.jp/english/centers-services/central-clinical-facilities/translational-research-center/index.html, 2015年11月18日閲覧）より。

7）同イニシアティブのウエブサイト（http://plaza.umin.ac.jp/tri-u-tokyo/ja/index.html, 2015年11月18日閲覧）より。なお同イニシアティブは，「大学での学術研究の成果を医療におけるイノベーションにより早く最適な形で変換（トランスレート）し，もって医療に貢献する」とその使命を説

訳語は確立していないことがうかがえる[8]。

国際的にみても，この用語は，基礎研究をふまえて臨床適用に向けた次の段階の研究を進めること，臨床研究を効果的・効率的に実施すること，操作された環境で効果が示された医薬品・治療方法を社会で普及すること，など幅広い意味において用いられている（Woolf 2008）。この中で，操作された環境で効果が示された介入方法の社会への普及（dissemination）ならびにその実施（implementation）過程に生じうる諸問題を明らかにし，効果的な普及と実施を図っていくことを目的として行われているのが普及・実施研究（D&I Research）である（Brownson, Colditz et al. 2012）。

このようにトランスレーショナル研究が幅広い意味をもっているところから，移行の段階による区分がなされている。この区分は，研究過程を，臨床研究によって介入方法が確立する過程と，介入方法が確立してから社会で普及・実施される過程とに分け，それぞれにおいて，研究を社会への具体的貢献により近いところ―この場合は，医薬品等による直接的貢献をいっており，真理が明らかになることによる貢献等それ以外の面での貢献はさしあたり度外視されている―に移行させることが目指される。前者の過程におけるトランスレーショナル研究はT1研究，後者の過程におけるそれはT2研究と呼ばれる（Sung, Crowley et al. 2003; Rabin, Brownson et al. 2008; Woolf 2008; Rabin & Brownson 2012）。T1研究は「ベンチからベッドサイドへ」の移行を目指すものであり，T2研究は「（研究がなされる医療機関での）ベッドサイドから第一線の診療実践へ」の移行を目指すものである（Rabin, Brownson et al. 2008:119）。

T1研究では，操作された環境において医薬品等の介入方法が他の介入方法と比較され，より有効な作用があるかどうかが検討される（効能研究）。臨床医学領域では通常無作為割り付け試験を用いて検討され，副作用の評価等を含めた総合的な評価が行われる。

T2研究では，臨床試験のような操作された環境ではなく，実際の社会が舞台となる。医薬品であれば，どのような病状の患者にどのように投与するか，副作用として注意しておくべき点は何か，適用できないのはどのような場合か，などの知識とともに，一般の臨床家がより多様な患者にこの治療法を実施することになる。

T2研究には，効果研究（effectiveness），普及研究（dissemination research），実施研究（implementation research）が含まれる。効果研究は，効能研究とは異なり，社会で実際に接する患者に，実際に生じうるさまざま場面で治療を実施し，有効性が認められるかどうかを検証するものである（Cochrane 1972=1999）。たとえば，大学病院だけでなく，地域の基幹病院において実施され，そこでの結果が検討される。患者層も医学的に許容される範囲内ではあるが，現実に生じうる幅広い人々を選ぶことになる。社会的・文化的要因を考慮する必要がある介入であれば，人種・エスティシティ・所得・教育などを考慮した，さまざまな集団に対して実施する必要がある。

普及研究は，確立した介入がいかに普及するかを検討するものである。これには，たとえば実証にもとづく知識を普及する，あるいは関係者が共有していくこと（知識トランスレーション）などとともに（Sudsawad 2009），資源利用に関する問題も含まれる。

実施研究は，地域，学校や職場など現実の特定の場面で，実施がうまくいくかどうか，その際に必要な資源は確保されるのか，それぞれの場面の社会的文脈はどのように影響するのか，

明している（http://plaza.umin.ac.jp/tri-u-tokyo/ja/mission/index.html，2015年11月18日閲覧）。

8）医学領域の用法を念頭においてあえて意訳すると，T1研究は「基礎臨床連携研究」と，T2研究は「臨床技術普及研究」とすることができよう。

などを検討するものである。

近年ではT2研究を効果研究に限定してとらえ，現実の医療制度における適切なサービス実施に関わる研究をT3研究と，サービス実施がもたらす人々の生活や健康状態の変化に関わる研究をT4研究と，またヒトを対象とせず行われる基礎的な研究をT0研究とする区分が提示されている（Blumberg et al. 2012; Dougherty and Conway 2008; Westfall, et al. 2007; Institute of Medicine 2013; Kon 2008）。T3研究は社会全体を視野にいれた実施に向けた政策を含んだ研究となり，T4研究は新しい治療法や公衆衛生上の介入が人々の健康にいかに影響したかという評価を含む。Tの後の数字が大きくなるほど，社会への具体的影響が計られることとなるが，トランスレーショナル研究では数字を大きくする方向だけではなく，臨床課題を基礎研究に落とし込む数字を少なくする方向への連携も課題とされている（Blumberg et al. 2012）。

科学論からみればここで述べた区分をさらに検討することも可能と思われるが（Gibbons 1994=1997），これらの区別は科学論というより，研究戦略上の位置づけを明らかにするためのものであり，本稿では，さしあたりここまでの記述にとどめておく。

Ⅱ　対人支援領域におけるトランスレーショナル研究に向けて

1　トランスレーショナル対人支援研究の意義

これまで述べてきた医学におけるトランスレーショナル研究の根本にある，新しい知識や技術を社会に迅速に普及させるべく組織的・戦略的な研究を体系的に推進するという考え方は，対人支援領域においても重要な考え方と思われる。そして，心理学・社会学等の諸学の研究の進展をふまえ，それらを用いて新たな支援法の創出を行うT1研究と，新たに有効性が示された支援法を普及・実施していくT2研究との両区分において，トランスレーショナル対人支援研究を進展させていく構想は可能である[9]。

支援のためのT1研究においては，心理学・社会学等の諸学において蓄積されている基礎的知見を，いかに現場で有効な支援方法に活用するかということが追求される。たとえば，基礎研究と応用研究の亀裂が指摘されていた行動分析学では，それらの架橋のためにはそれぞれの研究に習熟した研究者が共同して研究をすすめていくことが唱えられている（Hake 1982; Mace & Critchfield 2010）。同様に，認知心理学，社会心理学等が明らかにする法則や理論をふまえた新たな介入方法を開発していくことも探求課題である（Mace and Critchfield 2010; Sharp, Monterosso et al. 2012）。

支援のためのT2研究では，ある実践場面で妥当性が確かめられた支援方法を，他の支援の場面に普及し，そこで実施していくことが検討される。たとえば，依存症治療について，証拠に基づく実践の受け入れ準備状況，治療スタッフの特性，各種治療法の普及状況を調査し，どのようにすれば適切な治療法が普及するかを検討することである（McGovern, Fox et al. 2004）。そこでは，ある実践者・研究者の共同研究グループが新しい有効な支援法を開発した場合に，他の場面や文脈での適用可能性を検討し，多くの支援実践の場面で，より有効な支援法を行うことができる道筋の検討がなされることになる。

このように，支援実践とその研究においても，トランスレーショナル研究の概念を用いて，新しい実践方法を開発し（T1研究），それが多くの支援実践の場面で活用されるようにする（T2

9）ソーシャル・ワーク分野においてはPalinkas & Soydan（2012）がT2研究領域を中心に検討を行っている。T0からT4までの区分において検討することも可能であるが，本稿ではT1とT2という区分でさしあたり説明している。

研究）ことには，積極的意義が見いだされる。

2　トランスレーショナル対人支援研究の留意点

ただし，トランスレーショナル対人支援研究の展開においては対人支援の特徴をふまえることが重要であり，以下のような点に留意して検討していくことが重要であろう。

第一に，支援が行われる場面は複雑であり，さまざまな条件・主体によって，さまざまな方法によって実施される。さらに，支援が対象とするのは個人とそれを取り巻く関係者，あるいは関係性の中におかれた個人である。そのため，支援の課題は，場所の影響を受け，時間的にも変化していく。このことは，時間・空間・文脈の変化が生じることを前提として，研究が実施・解釈されねばならないことを意味している

こうしたことから対人支援ではその評価している介入方法の定式化について熟慮する必要がある。医薬品であれば，製剤を均質につくることによって介入手段の均質性は担保される。しかし，対人支援ではそのような均質性を担保することは容易ではない。それゆえ，対人支援のエビデンスを集積する上で，その集積単位となる実践をどう概念化するかが重要な課題となる。

第二に，既存の法制度などが対人支援の方法を規制し，その文脈を定めることである。支援の相互作用はそれが行われる制度的文脈によって影響を受ける。医療においては，治療関係が確立していれば，医学常識や社会的通念にかなっている限り，医師と患者との合意によって介入方法を決めることができる。しかし，対人支援の場合にはそのようなことはあまり想定できず，どのような制度のもとでそれが行われるかによって，支援者の関わり方は変化しうる。たとえば被害 - 加害関係など複雑な関係の中にどのように支援者が関わるかは，支援実践に影響を及ぼすであろう。こうしたことから，トランスレーショナル対人支援研究では制度的文脈を考慮することが重要となる。

第三に，支援研究は，内在的に葛藤を含むものかもしれない。というのは，支援実践は対象者を全体的にとらえるものであるが，研究では何らかの焦点を定める必要があるからである。研究者が実践者の発想や問題意識を尊重して，側面から支援するというポジションにたつことが，実践場面に近い研究においては適当かもしれないが（高山 2008），適切な研究デザインが選ばれなければエビデンスとして活用することはできないかもしれない（岡田 2007）。実行可能でエビデンスとして活用しうる成果を産出できる研究デザインを，特に複雑で困難な状況のもとで，研究者と実践者が協力して実施することは対人支援での重要な課題となる。

さらに，実践とよりそった研究が研究者コミュニティやその帰属する組織において評価されるかどうか，という問題もある。つまり，トランスレーショナル研究が進展するためには，それが学術研究の一部として認められていく体制がないと難しい。逆にいえば，政策的なトランスレーショナル対人支援研究の振興は，学術関係者の評価基準や研究デザインに影響を与えるものともいえる。

最後に，対人支援がさまざまな組織や個人によって実施されていることから，新しい実践法の普及・実施過程も多様なものにならざるを得ない。たとえば，行政活動の一環として支援が行われている場合と，病院のように一定の自律性を与えられた機関が支援を実施している場合とでは，新しい実践法が取り入れられていく過程はかなり異なるであろう。また，保健・医療・福祉の諸制度の一部として確立している支援の場合と，そうでない場合では，大きな差があるものと思われる。医療においても病院と診療所では新しい臨床実践の普及・実施過程は違うであろうが，対人支援においては普及・実施過程はいっそう多様なものであり，それをふまえた

上でその過程を検討する必要がある。

Ⅲ　むすび

本稿では，トランスレーショナル研究とそれに関連する普及・実施研究の概念の対人支援領域における活用には，より効果的な支援実践を生み出し普及する上で意義が認められること，その際には対人支援領域の特徴をふまえた独特の課題の検討が必要となること，を述べてきた。政策的に支援のトランスレーショナル研究をすすめる上では，対人支援の領域で何をもって確立した援助法というのかという点が，特に重要な検討課題である。そのような点を含めて，対人支援における学・実連環型研究を展開する上で，トランスレーショナル対人支援研究の方法論をさらに検討していく必要があろう。

謝辞

本論文は，文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」(2013-2015 年度）の資金を受けた研究成果の一部である。また，本稿は筆者がフランス国立科学院（CNRS）・PACTE 部門（グルノーブル・アルプ大学附設）に客員研究員として滞在している間に執筆された。記して感謝する。

引用文献

Blumberg, R. S., Dittel, B., Hafler, D., von Herrath, M. and Nestle, F. O.（2012）Unraveling the autoimmune translational research process layer by layer. *Nature Medicine*, 18（1）, 35–41.

Brownson, R. C., Colditz, G. A. and Proctor, E. K., Eds.（2012）*Dissemination and Implementation Research in Health: Translating Science to Practice*. New York: Oxford, Oxford University Press.

Cochrane, A. L.（1972）*Effectiveness and Efficiency : Random Reflections and Health Services*. London: Nuffield Provincial Hospital Trust. 森亨（訳）（1999）効果と効率：保健と医療の疫学．サイエンティスト社.

Collins, F. S., Wilder, E. L. and Zerhouni, E.（2014）NIH Roadmap/Common Fund at 10 years. *Science*, 345（6194）, 274–276.

Dougherty, D. and Conway, P. H.（2008）The “3T’s” road map to transform US health care: The “how” of high-quality care. *JAMA*, 299（19）, 2319–2321.

Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P., and Trow, M.（1994）*The New Production of Knowledge : The Dynamics of Science and Research in Contemporary Societies*. London: Sage. 小林信一（監訳）（1997）現代社会と知の創造：モード論とは何か．丸善.

Hake, D. F.（1982）The basic-applied continuum and the possible evolution of human operant social and verbal research. *The Behavior Analyst*, 5（1）, 21–28.

Institute of Medicine（2013）*The CTSA Program at NIH: Opportunities for Advancing Clinical and Translational Research*. Washington, DC: The National Academies Press.

Kon, A. A.（2008）The Clinical and Translational Science Award（CTSA）Consortium and the translational research model. *American Journal of Bioethics*, 8（3）, 58–60.

Mace, F. C. and Critchfield, T. S.（2010）Translational research in behavior analysis: Historical traditions and imperative for the future. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 93（3）, 293–312.

McGovern, M. P., Fox, T. S., Xie, H. and Drake, R. E.（2004）A survey of clinical practices and readiness to adopt evidence-based practices: Dissemination research in an addiction treatment system. *Journal of Substance Abuse Treatment*, 26（4）, 305–312.

Morrow, G. R. and Bellg, A. J.（1994）Behavioral science in translational research and cancer control. *Cancer*, 74（S4）, 1409–1417.

岡田まり（2007）根拠に基づくソーシャル・ワーク実践を目ざして：精神障害者の生活支援についての

研究を通して．社会福祉学，48（1），179–181.

Palinkas, L. A. and Soydan, H.（2012）*Translation and Implementation of Evidence-Based Practice*. New York: Oxford, Oxford University Press.

Rabin, B. and Brownson, R.（2012）Developing the terminology for dissemination and implementation research. *Dissemination and Implementation Research in Health: Translating Science to Practice*. Brownson, R. C., Colditz, G. A. and Proctor, E. K. New York: Oxford, Oxford University Press, 23–54.

Rabin, B. A., Brownson, R. C., Haire-Joshu, D., Kreuter, M. W. and Weaver, N. L.（2008）A glossary for dissemination and implementation research in health. *Journal of Public Health Management and Practice*, 14（2）, 117–123.

Ruttenberg, A., Clark, T., Bug, W., Samwald, M., Bodenreider, O., Chen, H., Doherty, D., Forsberg, K., Gao, Y., Kashyap, V., Kinoshita, J., Luciano, J., Marshall, M. S., Ogbuji, C., Rees, J., Stephens, S., Wong, G. T., Wu, E., Zaccagnini, D., Hongsermeier, T., Neumann, E., Herman, I. and Cheung, K.-H.（2007）Advancing translational research with the Semantic Web. *BMC Bioinformatics*, 8（Suppl 3）, S2. doi: 10. 1186 / 1471–2105–8–S3–S2.

Sharp, C., Monterosso, J. and Montague, R.（2012）Neuroeconomics: A bridge for translational research. *Biological Psychiatry*, 72（2）, 87–92.

Sudsawad, P.（2009）Knowledge translation: Introduction to models, strategies, and measures（2015年11月20日取得 http://ktdrr.org/ktlibrary/articles_pubs/ktmodels/index.html）.

Sung, N. S., Crowley, W. F., Jr., Genel, M., Salber, P., Sandy, L., Sherwood, L. M., Johnson, S. B., Catanese, V., Tilson, H., Getz, K., Larson, E. L., Scheinberg, D., Reece, E. A., Slavkin, H., Dobs, A., Grebb, J., Martinez, R. A., Korn, A. and Rimoin, D.（2003）Central challenges facing the national clinical research enterprise. *JAMA*, 289（10）, 1278–1287.

高山恵理子（2008）研究と実践の狭間：経てきた経験から考える．社会福祉学，49（1），123–126.

津田耕一（2008）実践と研究との架け橋：実践と理論との融合を目指して．社会福祉学，49（1），127–130.

Westfall, J. M., Mold, J. and Fagnan, L.（2007）Practice-based research—“Blue Highways” on the NIH roadmap. *JAMA*, 297（4）, 403–406.

Woolf, S. H.（2008）The meaning of translational research and why it matters. *JAMA*, 299（2）, 211–213.

山口光治（2008）問題解決型研究を目ざして：高齢者虐待防止に向けた実践的研究を通して．社会福祉学，49（1），131–134.

Zerhouni, E.（2003）The NIH Roadmap. *Science*, 302（5642）, 63–72.

（受稿日：2015. 12. 1）
（受理日：2016. 3. 1）

Practice & Discussion

Translational Human Services Research: Achieving a More Active and Systematic Collaboration between Research and Practice

MATSUDA Ryozo
(College of Social Sciences, Ritsumeikan University)

To actively promote collaboration between research and practice, this paper discusses how the concept of "translational research", developed in medical science, can be adapted in human services research. A brief review of the existing literature shows that "translational research" means a strategic research transition from basic sciences to clinical evidences, from the establishment of clinical evidences to its dissemination and implementation, and noting their impact on population health. Using the concept of "translational research" has potential to strengthen strategic research collaboration between researchers and practitioners in human services. This paper discusses four critical points that translational human services research must consider in its development. First, because human services are complex, what is evaluated in research needs to is carefully clarified. Second, translational human service research shall carefully consider the contexts in which services are provided. Third, collaboration between practitioners and researchers should be developed, even in complex and difficult situations. Forth, translational human services research should explore varied processes of human services' dissemination and implementation.

Key Words : translational research, human services, research strategy,
translational human services research, collaboration between research and practice
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.34, 69–76, 2016.